

司書という仕事にふれて

梅 野 敏 明

私が司書という仕事にふれることができたのはつい最近のことである。そのきっかけは私が在学している別府大学の附属図書館にアルバイトをしていることからであった。

最初は所蔵している図書の配架から始まり、廃棄図書の処理、寄贈図書の処理、一般事務など多岐にわたっている。この体験を通して、今までは司書の仕事については漠然と所蔵図書の整理・管理、貸出業務ぐらいしか知らなかったのが、そのみならず、いかに教授陣や学生たちの要求に答えるかという目標のもとに限られた予算の中で図書をそろえることや、具体的でない学生の質問に答えることなど様々な仕事を行っていることを知ることができたのである。

私のような学生の学習活動や大学の先生たちの研究活動・教育活動は図書館やそこに勤める司書の人々の助けをかりて、初めて成り立っているといっても過言ではない。私は自分でも専門書を購入する時もあるが、新品を購入する時は本によっては一万円以上もする物があり、それをいちいち購入しては大変な負担となる。

それを図書館があるおかげで個人に大きな負担がかかることなく、学習活動や研究活動に励めるのである。そう考えると、私は司書という仕事やそれに携わっている人々に敬意を抱かざるをえない。

だが、最近は図書館のある状況が当たり前となったことが逆に図書館の社会的な意義を忘れさせ、学生の図書の無断持ち出しや本に対する雑な扱いなどといった困った状況がある。

私は大学生として、また司書という仕事にふれた人間として図書館を正しく利用していきたいと思う。

(うめの としあき 別府大学学生)